



学園花の村機関紙第

78号

2014年4月3日(木)

編集兼発行人 松井道夫

掛川市掛川1065

TEL

(0537) 24-0101

Fax 24-0242

Y-Mail#

mm317@tokai.or.jp

## 弘法の時間灸

津野 幸人

入学試験の時期が近づけば、菅原道真を祀る天神さんの境内が参拝者でにぎわう。私も鳥取在住の頃は、有名な神社に初詣をしたものだ。

たまたま娘が大学受験の年であったので家内が、お守りを買ってやるという。数多ある守護符を物色していると、神官が「もっといいのがある」と千円の品を取りだした。「高い方が良く効くのでしょうか」と家内が真剣な面持ちで質問した。気の毒にも老神官は絶句して、目を白黒するばかりだった。ささやかな庶民の神頼みである。

さきの太平洋戦争で、米軍の本土上陸が取沙汰されると、わがムラの男性は小学校運動場に招集されて、在郷軍人会長N中佐の指揮の下で竹槍訓練をやった。近所のKさんは訓練を途中で抜けて、田の草取りをしていた。やがて、訓練から帰ってきた村人は叫んだ。「Kよ、旨いこと言うて逃げたのう。N中佐は、」弘法の時間灸“にはびっくりしとったぜ」。Kさん曰く、「9

時に灸をすえとお大師さんが決めたといえ、なんぼ陸軍中佐でも負けるけんのか。」

私は四国の生まれで、弘法大師信仰の篤い農村で育った。ムラの少年は、年に一、二度は背中にお大師さんの灸をすえられたものだ。始は熱くて痛がって泣き叫んだが、やがて心地がよくなり寝入ってしまう。目覚めるとなんだか気分がすっきりした記憶がある。蓬(ヨモギ)の葉を乾かして、石臼でひくとモグサ(艾)が出来上がる。病状に合わせてお灸をすえるのは、往時の農村では最も安価な治療法で、これが大師信仰と一体化していた。

砂漠地帯は一神教、湿潤地帯は多神教だ、という宗教における環境決定論がわが国では流布している。だが、どの民族でも原始宗教は多神教で、除災のための呪術、祈禱を専門職が執り行なう。俗衆が期待するのは神のもたらす奇跡である。平安時代の仏教は皇族、貴族の安泰を祈願するところの呪術、祈禱をおこなうことで国家から厚い庇護を受けた。宗教改革以前、中世のキリスト教とても事情は全く同じであった。

ドイツの哲学者ヘーゲル(1770~183

1)は、呪術、奇跡を説く宗教を実定宗教とし、奇跡を否定して理性に訴え、倫理、道徳を高める宗教を理性宗教に峻別している。キリストの教えは「隣人を愛せよ」という人間の理性に訴えるものであるとして、その本質は理性宗教であるが、民族宗教の呪術性と習合したという。

時代の経過と共に宗教は、多神教から一神教へと発展するのではあるまいか。一神教は宇宙の創造神によって統合される。仏教においても後代においては、釈迦の説いた理性的な解脱説からは大きくはずれた教義が生まれた。弘法大師がもたらした真言密教は大日如来という宇宙仏(神)を立てることで一神教的性格を帯びた。ただ、民衆がこの高度で難解な教義をどれほど理解したかどうかは疑問だ。この宗派も、導入の過程では、皇族、貴族の病氣平癒や、雨乞いの祈禱を行った。これらの現世利益の標榜が日本人の宗教心を歪なものとしており、自己規制という真の宗教への道を妨げているのだ。

仏教にも多くの宗派があるが、それぞれの教義を煎じ詰めていけば、「悪事をなすな。善を行え。自らの心を清めよ。」の三点に尽きるとされている。このように理性にはたらきかけて、人心をして道徳に昇華させるのが真の宗教だと思ふ。この立場からすれば、現代の有機農業にも宗教性が認められるのである。